

タイ語訳の日本文学

Kanlayanee SITASUWAN

タイ国における日本研究は経済、政治、社会、それに歴史の方面は盛んです
が日本文学研究の方はあまり盛んではありません。タイ語訳された日本文学も
まだ少なく歴史も浅くて、五十年になっていません。

タイ語訳の一番古い日本文学の作品は徳富蘆花の『不如帰』ですが、これは
1954年に英語訳の『NAMIKO』という本よりタイ語に訳され、ある週刊誌に
連載されました。これを翻訳したのはタイの有名な翻訳家のアマラワディです。
このタイ語訳された『不如帰』は二十一年後つまり1975年に単行本になりました。
た。

初めて翻訳された1954年から十二年間ぐらいタイ語訳の日本文学は見あたり
ません。1966年になって、やっとクックリット・プラーモート^①が英語訳の題
では『羅生門』、つまり芥川龍之介の『藪の中』をタイ語に訳しました。これ
は脚本の形をとっており、実際にプミポン国王の前で上演されました。タイ人
にすばらしい芥川の作品が紹介されたのです。つまり一つの出来事に対して三
人がそれぞれ自分の観点から自分の都合のいい解釈をしていることは芥川が人
間性をするどく観察していたことがよくわかります。1967年に竹山道雄の『ピ
ルマの豎琴』がチュン・プラパウィワット^②によってタイ語に訳されて学校の
副読本になり、学生たちは読まされました。

1969年に『不如帰』を翻訳したアマラワディは川端康成の『山の音』もタイ

語に訳しました。二年後の1971年に芥川の短編の『羅生門』がタイ語訳され、72年に川端の『雪国』、74年に三島由紀夫の『潮騒』が出ました。チュン・ブラパウィワットは一人で『ビルマの豎琴』、『雪国』、『羅生門』、『潮騒』をタイ語に訳しました。タイ人はこの三人の翻訳家、アマラワディ、クックリットとチュンによって日本文学作品に接する機会を得ました。これらの作品はすべて英語から訳されました。続いて1977年に三島の『午後の曳航』がフランス語からタイ語に訳されました。フランス語からのタイ語訳の日本小説はこれ一つだけです。

そのころ、つまり1969年から1977年にかけて川端と三島の作品が次々にタイ語に訳され、タイ人に注目され始めました。そのきっかけはおそらく1968年に川端康成が日本人としてはじめてノーベル文学賞を受賞したことと、1970年に三島由紀夫が切腹して、72年に川端が自殺したことからでしょう。そのころ世界中が日本の文壇に注目し、タイ人もたぶんはじめて川端と三島の名前を聞き、日本文学に興味をもちはじめたものと思われます。彼らの作品は幸い英語訳があるおかげでタイ人も英語を通して日本文学作品に接する機会がありました。

さて、タイにおいて日本文学が初めて日本語から直接タイ語に訳されたのは1970年代後半です。1977年にチュラロンコン大学文学部が『日本近代文学短編選 第一集』を出しました。その中に十二の短編小説が載せられました。国木田独歩の『春の鳥』、森鷗外の『高瀬船』、芥川の『蜜柑』、川端の『伊豆の踊り子』などです。二年後の1979年にまた本学は『日本近代文学短編選・第二集』と『同 第三集』のタイ語版を出しました。その中には森鷗外の『山椒大夫』、有島武郎の『一房の葡萄』、川端の『水月』、夏目漱石の『夢十夜』、太宰治の『おさん』などがおさめられています。これらの短編選集はチュラロンコン大学文学部の日本語講座のコースの一つである「日本近代文学」から出たものです。このコースを担当したタイ人教師が学生に翻訳させたものです。学生は日

本語を三年半だけしか勉強していなかったため、また日本文化の背景に対する知識も少なかったため、担当教師並びに日本人教師の指導と協力を仰ぎながら代表的な作品をタイ語に訳しました。

ここでちょっとタイにおける日本語教育に簡単に触れたいです。日本語教育はタイでは戦前も戦後も行われましたが、大学レベルの日本語講座は1965年に初めてタマサート大学で開かれました。66年にチュラロンコン大学でも開かれるようになりました。これらは日本の外務省の寄贈講座で選択科目として始まりました。1974年にチュラロンコン大学で専攻科目に昇格してタイで初めて正規の本格的な日本語専攻コースが誕生しました^③。その後、多くの国立大学でも日本語講座が開設され日本語は次第にタイの教育機関に普及してきました。1998年現在タイにおける日本語教育機関はおよそ二百ほどで学習者はほぼ四万人近くにも達しています^④。しかしその教育機関の中で日本語以外、つまり日本文化、日本文学を教えるところは非常に少ないです。つまり日本語がよくできなければ文学を読んでもわからないからでしょう。

チュラロンコン大学の日本語講座では日本文学史は必修科目で、日本近代文学は選択科目ですので、このコースを選んだ学生はやはり日本文学に興味をもつ学生と言えるでしょう。ですから日本近代文学短編選の第一集、第二集、第三集は日本語専攻の学生と先生の協力の結果だと思います。しかし時間と予算の関係でこのような短編選集の作成は十年間以上も中断を余儀なくされました。1991年になって、また本学は翻訳の伝統を復活させ、第四集の日本近代文学短編選を出版しましたが、前とはちがって芥川だけの短編選集です。この中には『地獄変』、『戯作三昧』、『芋粥』などをおさめました。そして1998年に同じく第五集の太宰治の短編選集を出しました。今後も2000年に第六集の宮沢賢治の短編選集を出す予定で、私は現在『北守将軍と三人兄弟の医者』を翻訳中です。

また ちょっと1978年に話を戻しましょう。その年 私は日本からタイへ戻ってチュラロンコン大学で日本語を教えている間、ある有名な出版社から頼まれて、芥川の『河童』を日本語からタイ語に訳しました。同じ年に小林多喜二の『蟹工船』も英語からタイ語に翻訳されました。当時タイの知識人は日本に対し、いろいろなことに興味をもっていたため、日本経済以外に日本の社会や、日本人の考えや労働問題などを知りたいと思いました。日本文学を通して日本のことを理解しようと思ったので英語からタイ語に訳されたものも歓迎していましたが、日本語から直接訳したものならもっと歓迎されたのです。というのは日本語から直接に訳したものの方がよりオリジナルに近いからです。翻訳家は日本語以外に日本文化もよく知っているため、より正しく翻訳ができるからです。しかし残念ながら日本語から直接タイ語に訳された文学作品は今申し上げただけしかありません。日本語がわかるタイ人、つまり日本に留学したタイ人は少なくありませんが、日本語、日本文化、日本文学に興味をもつ人は少ないのです。この元留学生たちはタイの教育機関で日本語を教えるのに大変忙しい上に文学作品一つを翻訳するのはとても時間がかかるため、翻訳する人はいません。またさらに著作権の問題もあって、お金にならないため日本語から訳した作品は少ないのです。しかし日本語がわからなくても日本文学に興味をもつタイ人は日本語がわかるタイ人より多いので英語を通してどんどん日本文学作品のタイ語訳が出版されました。翌年の1979年に谷崎潤一郎の『鍵』と三島の短編集『憂国』が英語からタイ語訳が出版されました。

1980年代に入ると、三島の『憂国』と他の作者の短編の本をはじめとして、1982年に大江健三郎の『個人的な体験』のタイ語訳が出版され、83年に漱石の『坊っちゃん』が出版されました。85年にはさらに五つの日本文学作品がタイ語に訳されました。これは川端の『雪国』、『千羽鶴』、そして島崎藤村の『破戒』森鷗外の『雁』と井伏鱒二の『黒い雨』です。86年から90年までの間に川端の『眠れる美女』、『古都』、『みずうみ』そして『名人』がタイ語訳された他

は有吉佐和子の『華岡青州の妻』や太宰治の『斜陽』そしてまた竹山道雄の『ビルマの豎琴』と灰谷健二郎の『兎の眼』のタイ語訳が出ました。安部公房の『砂の女』は1992年に出て、最近やっと漱石の『こころ』が日本語からタイ語に訳され1995年に出版されました。『こころ』を翻訳した人はタマサート大学の元日本語教師と学生です。

タイ語訳された日本の小説は全部で二十五ぐらいあります。また日本短編集のタイ語訳は先に述べたチュラロンコン大学の日本語から直訳した『日本近代文学短編選』第一集から第五集の他に三島、川端と芥川の短編の英語から訳したのものもあります。全部で六十あまりの短編小説がタイ語に訳されました。

ここでまとめてみますとタイ語に訳された短編小説は中編長編より多いです。小説の中では川端の作品が一番多いです。川端の作品が一番多いのは川端が日本の古典美を独自の感覚を通して現代に生かした作家^⑤だからでしょう。そして『憂国』と『ビルマの豎琴』が2、3回ぐらい翻訳されたのはこの話がタイ人を感動させるからだと思われます。短編の方は芥川の作品がよく翻訳されましたが、それは彼の作品が短くて変化に富んでいるからだと思われます。

小説以外に近松門左衛門の戯曲のタイ語訳があります。それは『曾根崎心中』や『心中天の網島』や『国性爺合戦』などです。これは英語から訳されたものは終わっていますが、まだ出版にいたっていません。あとは謡曲と狂言で日本語からタイ語に訳されたものもあります。これは『羽衣』や『葵の上』や『高砂』や『忠度』などがあります。私は狂言の『箕被』と『附子』を翻訳しました。

最後にタイにおけるタイ語訳の日本文学作品の今後の動向をみるとあまり明るいとは言えません。最近タイ語訳の日本文学はあまり見かけません。本屋へ行っても新しいものがなく、古いものもあまり売れないので出版も中止

されている状態です。なぜならよく考えてみると今までタイ語に訳された日本文学作品は筋書きに変化が乏しく情緒に富んだ作品が多いうえに、また話そのものがいまいなので、変化に富んだ作品が好きなタイ人にとっては日本文学はあまりおもしろくないからかもしれません。また最近コンピューターの普及とともに人々は本を読まない傾向にあり、また不景気なのであまり本が売れないのも理由のひとつに数えられます。しかしタイでは日本文学を勉強する人が減っているわけではありません。今学期チュラロンコン大学の大学院では日本文学のコースが開かれます。タイにおける日本語ブームの中でこれからは日本文学に関する研究も盛んになり、翻訳もたくさん出てくると期待しています。

注

- ① クックリット・ブラモート (1911-1995) 知識人、作家、評論家、コラムニスト、政治家、元首相。
- ② チュン・ブラバウィワット (1896-没年不詳) 知識人、在米国のタイ情報局元事務局長。
- ③ 松井嘉和、北村武士、ウォーラウト・チラソンバット、『タイにおける日本語教育』錦正社、1999、p.48
- ④ 国際交流基金バンコック日本語センター【タワン】の「日本語教育機関調査の結果」p.8 (1999年10月、第22号)
- ⑤ 国松昭『日本文学案内 (近代文学編)』1976、p.21 (東京外国語大学特設日本語学科)

参考文献

1. Funghthammasarn, Arthorn. "Development of Japanese Studies in Thailand: Japanese Literature (1981-1984)" in *The Institute of East Asian Studies' Report*. Thammasat University, 1985
2. Pornsawatdipak, Susiri. "Japanese Literature Education at Present (1993)" in *Aksornsart Silapakorn University*. No.1-2 (1993-1994) pp.81-92
3. Sornsri, Seeda. *Annotated Bibliography on Japanese Material Published in Thailand*. The Japan Foundation, 1983
4. 国松昭『日本文学案内 (近代文学編)』(東京外国語大学特設日本語学科) 1976
5. 久松潜一、木俣修、成瀬正勝、川副国基、長谷川泉、編集『現代日本文学大辞典』増訂縮刷版、明治書院、1983.
6. 松井嘉和、北村武士、ウォーラウト・チラソンバット『タイにおける日本語教育』錦正社、1999.

付録1

タイ語訳の日本文学の年表

- 1954年 徳富蘆花 『不如帰』
- 1966 芥川龍之介 『羅生門』 (→藪の中)
- 1967 竹山道雄 『ビルマの豎琴』
- 1969 川端康成 『山の音』
- 1971 芥川 『羅生門』 と他の短編
- 1972 川端 『雪国』
- 1974 三島由紀夫 『潮騒』
- 1977 三島 『午後の曳航』
- ★『日本近代文学短編選 第一集』 (チューラー大)
- 1978 小林多喜二 『蟹工船』
- ★芥川 『河童』
- 1979 ★『日本近代文学短編選 第二集』
- 三島由紀夫の短編集 『憂国』
- ★『日本近代文学短編選 第三集』
- 谷崎潤一郎 『鍵』
- 1980 三島 『憂国』 と他の作者の短編
- 1982 大江健三郎 『個人的な体験』
- 1983 夏目漱石 『坊っちゃん』
- 1985 川端 『雪国』
- 『千羽鶴』
- 島崎藤村 『破戒』
- 森鷗外 『雁』
- 井伏鱒二 『黒い雨』
- 1986 有吉佐和子 『華岡青州の妻』
- 1987 太宰治 『斜陽』

- 川端 『眠れる美女』
- ★高木敏子 『ガラスの兎』
- 1988 川端 『古都』
- 灰谷健二郎 『兎の眼』
- 竹山道雄 『ビルマの豎琴』
- 川端康成の短編集 『伊豆の踊り子』
- ★中国と日本の短編 (チュラ大のTranslation Center)
- 1989 川端 『みずうみ』
- 1990 『名人』
- 1991 ★『日本近代文学短編選 第四集 芥川龍之介短編集』
- 1992 安部公房 『砂の女』
- 1995 ★夏目漱石 『こころ』
- 1998 ★『日本近代文学短編選 第五集 太宰治短編集』

★は日本語から翻訳したもの

付録 2

チュラロンコン大学文学部による日本語から直接訳された短編集

1977年 『日本近代文学短編選 第一集』の中の短編小説

1. 国木田独歩 「春の鳥」
2. 森鷗外 「高瀬船」
3. 志賀直哉 「正義派」
4. 「小僧の神様」
5. 武者小路実篤 「だるま」
6. 菊池寛 「入れ札」
7. 芥川龍之介 「蜜柑」
8. 「杜子春」

9. 川端康成 「伊豆の踊り子」
10. 井伏鱒二 「山椒魚」
11. 佐多稲子 「キャラメル工場から」
12. 太宰治 「走れメロス」

1979年 『日本近代文学短編選 第二集』

1. 森鷗外 「山椒大夫」
2. 有島武郎 「一房の葡萄」
3. 「僕の帽子」
4. 「火事とポチ」
5. 芥川龍之介 「秋」
6. 尾崎一雄 「華燭の日」
7. 川端康成 「水月」
8. 横光利一 「蠅」
9. 島木健作 「赤蛙」
10. 葉山嘉樹 「淫売婦」
11. 林芙美子 「風琴と魚の町」
12. 堀辰雄 「ルベンスの戯画」

『日本近代文学短編選 第三集』

1. 島崎藤村 「のぼした」
2. 佐藤春夫 「スペイン犬の家」
3. 内田百閒 「昇天」
4. 壺井栄 「柳の糸」
5. 井伏鱒二 「屋根の上のサワン」
6. 太宰治 「おさん」
7. 夏目漱石 「夢十夜」

8. 開高健 「パニック」
9. 阿川弘之 「鱸とおこぜ」
10. 丹羽文雄 「厭がらせの年齢」

1991年 『日本近代文学短編選 第四集』 芥川龍之介短編集

1. 「羅生門」
2. 「藪の中」
3. 「芋粥」
4. 「地獄変」
5. 「戯作三昧」
6. 「トロッコ」
7. 「白」
8. 「三つの宝」

1998年 『日本近代文学短編選 第五集』 太宰治短編集

1. 「富嶽百景」
2. 「女生徒」
3. 「駆け込み訴え」
4. 「待つ」
5. 「ウィヨンの妻」
6. 「赤い太鼓」
7. 「桜桃」
8. 「魚服記」

*** 討議要旨**

Sonja ARNTZEN氏は、英語のできるタイ人は多いのか、多いとすれば英訳を読んで済ませられるからタイ語訳が少ないのではないかと質問し、発表者は、英語は第一外国語として広く学ばれているが、できる人は少ない、また、たとえ英訳を読んだとしても文化的背景がわからなければ正しい理

解はできないから、原典から直接のタイ語訳は必要である、と答えた。

大黒貞明氏は、「ビルマの堅琴」など、同じ作品が複数回翻訳されているが、解釈は同じか、と質問し、発表者は、さまざまなきっかけで同じ作品が新たに翻訳されているが、解釈は違う場合がある、と答えた。

顧偉良氏は、台湾・韓国では吉本ばななや村上春樹、さらには渡辺淳一などの現代作家の作品が翻訳されて大いに読まれているが、タイではどうか、と質問し、発表者は、日本語が分かる人が少ないので、定評のあるものしか翻訳されない、黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』の翻訳はよく読まれたが文学とは言えないのでリストには載せていない、私自身は林真理子の「ワイン」を訳したことがある、実は源氏物語をやりたい、と答えた。

江口季好氏は、タイにおいては児童詩はどのような状況になっているか、と質問し、発表者は、JALが後援して子どもの俳句大会が毎年行われている、子どもたちは学校で俳句（タイ語で十七音の詩）を習っている、と答えた。